

# 西 朋

Leurenbericht

8

都立西高OB山岳会

# 山行計画

30 川哲山衆中(要取変更) 9月24~25日

面校山岳部十週年記念 総指揮 田中(晋) 衆中25日2時獅子口

A 入川谷燕厂沢 L 田中(晋)

B 川哲火打石谷 L 福田

C 犬麦谷 L 平沢

D 愚谷 L 田中(晋)

現役 小川谷滝谷 荒上谷 倉沢 堀地谷 坪川谷左股

31 魚沼三山兼走 L 平沢 10月9~12日

32 鹿高岳(奥又白より西麓) L 田中(晋) 10月15~20日

33 勘七沢 L 未定 10月30日

# 資料より見たる積雪期魚沼山塊

田中 潤 利

(1) 尾瀬沼を東端とし平岳(二一四〇)・鍋倉(一九九八)丹後(一八〇九)巻根(一九六二)朝日(一八一九)谷川(一九六三)仙倉(二〇二六)の諸峰を連ね白砂山(二一四〇)を以て西端とする延々一五〇軒に及ぶ山嶺を我々は上越西境と呼んでいる。これに対する冬期記録は越後(二三四六)を中心とする尾瀬周辺を除くとわずかに谷川岳周辺が岳人の対象となつて居るに過ぎない。此所で僕が問題にしたいのは、この主稜より岩越國境(只見川)寄りには位置する越後魚沼の山群である。宗教的に早くから開けて居りながら何故冬期の対称とならないのか。主要山岳をあげて見ると、中の岳(銀山二〇八五)・駒ヶ岳(二〇〇三)・荒沢岳(一九六三)・鬼岳(一九二五)・八海山(一七七五)の五座がある。高度は奥多摩長沢背稜程度であるが、標高一五〇〇に及ぶ。魚沼平野から直立する高差は実に一五〇〇〜一八〇〇。氷に及び更に上高地よりの稜高、土合よりの谷川のそれをしのぎ、飯岳西面白秋剣のそれに比較すると同時に、十月下旬より見る新雪は十二月一月と、季節風が極り、いつ止むともしれず降りつゞき、二月には小出(一〇〇〇)ですら三氷の積雪を見る。四月より好転する天候も五月初旬まで降雪があり、雪崩の業と化す。六月初旬、積

雪のブロッフが落ちつくす迄は積雪期として考えたい。谷を窪める雪は万年雪となつて次の年へ持込まれ、又新雪が全てを埋め尽くしてしまふ。地形は谷川東面のそれに似て冠岳を除く四座とも荒々しく削られている。加えて谷川より稜線が悪く、記録の多くがスキートの使用出来る北、又剣に限られて居るのを見てもうなずけよう。水無川水域に至つては十一月〜四月迄の記録なく(夏ですら無数の未登攀帯だ)越後三山と云われる局、中、八海の初級走すら積雪期初登攀以来廿五年間の寒月を受けているのを見て如何に悪いかどうかがえらると思ふ。開拓期は学生山岳部が主力でありしかも人夫を伴い、北、又剣から登つて居るが、これら学校山岳部は、昭和十年を期として、独立早等が中心となつて山登りの形式は一変した。日本の山にしても、ラッシュユタフティツクの時代から雪中導索の研究、菓田としての冬山、即ち、より活動範囲広張のボーラーメソッドへと転換した。それと同時に学生界から谷川、魚沼が見捨てられた。何故か。斯様な悪件(山こそボーラーの対称であるべきなのか、それまでの記録が全て北又剣から明神尾根の唯一のスキールトからのみの登攀であつて、水無剣の悪さ、稜線の悪さ(何故ルートとして採れないか)を融れていない。

記録の多くも記行であつて単なる頂上マニヤにすぎず、ヴァリアンテに対する意欲に非常に乏しい。気象考察がわずかに「山岳」第三五年二号(山中興一北又川一)があるのみである。昭和十年より廿五年の間、供の努力が足りず、未だ一つの記録も手にしていない。突厥岡が谷川に全力を傾注して居る頃のものだ。戦前は水照川のヴァリエーション三本が、昭和廿四年七月、川崎山岳会によつて登られ、東京岳連にて翌春の連合積雪期上越国境縦走の一環として取り上げられるに至つた。所が岳連で最盛を誇つた巻歩溪流会隊がまず八海山で放棄に挫折してしまつた。この敗北は一般山岳会に大きな反響をもたらし、第二の谷川として浮び上つた。これで学校山岳部にあつて積雪期急沼に突撃団時代が台頭したのである。

記 録

1 一九二九年二月一六日〜三月七日

神戸商大・中川秀次・高橋、人夫二名 降り続く豪雪(大湯四米)の中を枝折峠越三月五日中荒沢小屋よりスキーにて一八〇米に至りアイゼンで積雪期約ヶ岳初登攀、風雪の渦中、岳断念。(「ヤマ」六号による)

●(注)これに元立ち慶大登高会大野亮吉氏、一九二八・三、駒岳を計画せしも直前の三月廿五日、前穂北尾根にて故人となられている。(「登高行」七号)

2 一九二九年三月 慶大波木井六男 斎藤長寿郎 山田喜一 岸斐一の四名、一七日小出登、枝折峠明神社の祠にもぐり込

み二日フラストした明神尾根より駒岳第二登一気到大湯へ下る。(「登高行」七号)

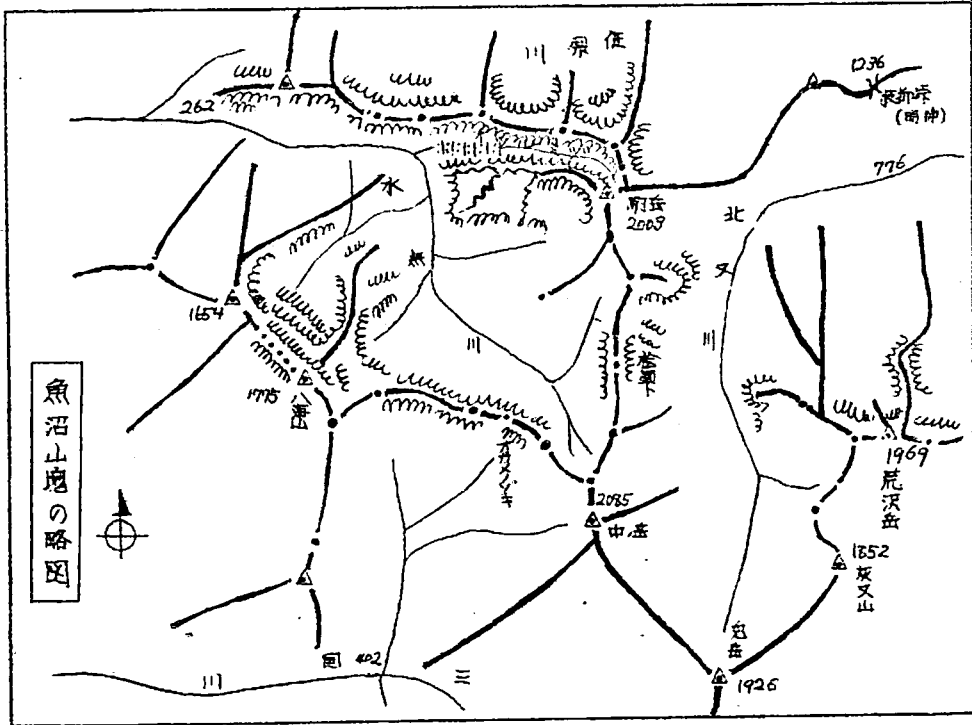
3 一九二九年五月 慶大 斎藤長寿郎他、一二日小出登、羊川まで自動車入る。一五日グミ沢より荒沢岳乗、一五一四峰尾根をアイゼンにて登り、荒沢岳、灰又山を越えて一七四九峰にてヒートフ、雪は三月に比してしまれども足下より蜜餅れ行くこと数回、一六日、雨なるも兎岳、中岳を下り一三三四峰下にて再びヴィヴァック、稜上のプロック所々残り居りオカメノゾキは雪なし、一七日、八海山ハツ峰(プロック火半落ち尽しあり)を越え大崎へ下る。(「登高行」七号)

4 一九三一年一月 慶大 大河原善作 金山淳二、八海山初登攀(詳細不詳)

5 一九三一年三月 慶大 大河原善作 金山淳二、二八日城内より八海山五電池にテントを出し三〇日中岳に向うも積雪積雪状態悪くオカメノゾキにてヒートフ、三十一日、悪天候を中岳へ登りスキーをつけて灰又山に達しヴィヴァック北又川を苦勞して下り枝折峠を越え三日大湯へ下る。(「登高行」八号)

6 一九三二年三月 山形高、桜井敏夫 崎崎健造 入江明 田中興 吉田三郎他八夫三名 十五日小出登、十六日枝折越野投沢小登入り、二三日スキーにて明神尾根より駒岳登頂、二四日大湯へ下る。(「山岳」三五年二号)

7 一九三二年三月 一橋大 高見要 鈴木英雄 増山清太郎 十合使二の四名十八日大湯入、二三日明神越白沢出合小屋へ入



- る。二四日駒岳登頂。二六日北又に沿いてスキーで登り中岳肩に達するもアイゼンなく、又時期なく登れず一六時間小屋へ帰る。三十一日大湯へ下る。(針ヶ村、大号)
- 8 一九三二年三月 明大(パーテイ不祥)二四日明神の祠に入り二七日駒岳登頂。(6・7の文中による)
- 9 一九三二年五月 中島浩一郎他人夫一名 十三日枝折越村杉の民家泊(釜山平、村形の節落は出作りである)荒沢北壁は雪もつけずすばらしい。十四日マエクラの尾根へアイゼンを着け取付き荒沢岳に到り暮営。北壁の雪崩敷し、十五日兜岳、中岳を至り松原下手前暮営。翌日駒岳より明神を至り大湯へ下る。(「山岳」第三七年の二号)
- 10 一九三三年三月 山形高 田中実 人夫一名 二七日大湯入二九日枝折越管投小屋に入る。三〇日マエクラの尾根にルートを取り荒沢岳に登頂。一六〇。米より上部はアイゼン着用、表層雪崩を三回喰う。三一日中岳偵察。四月一日タキノハナ沢出合スキーデボ、肩へ至る尾根より中岳登頂。二日大湯へ下る。(「山岳」第三五年二号)
- 11 一九五〇年三月登山派派流会 川上元良 宮野元幸他 岳屋界一隊として一七日大湯入り。二一日八海山千木松に五名サボトと共に迷出。二四日八峰を越え五竜池。二五日中岳へ向うも稜線極度に悪く、一三四四附近にてピバトク。二六日断念して城内へ下る。(「山と溪谷」一四三号)
- 12 一九五〇年三月 川崎山岳会 天野誠吉以下五名岳屋界徒二

隊として三國川サグリより中岳へ登らんとするも廿一日よ敷風雪となり・二三日積雪より一日かけて十字峽との中間までしか進出出来ず断念 廿三日六日市へ下るも第一隊と連絡とれず。  
(「山と溪谷」一四三号)

13 一九五二年四月 小出山岳会 皆川亮一他 一日大倉より水蒸川に入り 毛子ガ花沢小屋 雪少くフレパス多数二日水無川S字を至てシン沢を登り中岳小屋に至る。(板状雪崩を喰う)三日北又シバ沢を下降北又開原場へ出る。積雪崩水無洞の最初のものである。(「山と溪谷」一七九号)

14 一九五三年十一月 山岳連礼俱樂部(詳細不明) 藤川松枝 他(ガムス三号)

15 一九五四年四月 山岳連礼俱樂部 新村正一 高橋照 芥取夫 後藤静男 秋山正人の五名八日大崎と出 十日八海山八峰を越し五竜池十一日オカメノゾキ突破し十二日中岳 十三日駒岳 十五日御界尾根を一四二〇米峰まで下り 長沢沢から大湯へ下る。これは諸所奥沼三山に於ける積雪期初探求であり御界尾根上部の唯一の記録である。(「山と溪谷」一九〇号)

以上一五の記録を挙げて見たが、実際には昭和十年より廿五年までの記録もあると思う。これらから云える事は、二・三の例外(戦後のB・C)を除いて全部が、今年は何十年求の大雪山と書いているのが、実はこの山塊の気象の悪条件を物語っている。

よう。十二月より二月の季節風最盛の時ほとんどかくとしても、三月下旬ですら昭和七・八年及び廿五年の如く、五日も一週間も敷風雪が吹きまくることも珍らしくなく、一夜に二米も降る事すらある。日本海からの、直接温度の高い雪を降らす為か、降る時は夕立の如くであり、スキーを付けて腰までもぐるが、止んで数時間もすると急取にしまつて来る等、雪質は極度なテリケートさを有している。雪底ブロック、雪崩の問題が登攀の大きな要素となっている。三月ですら三々四日に一日の行動が可能になるのだから、厳冬期は相当苦しい登攀を覚悟する要がある。やはり四月以降が最も天候が落ちつく。気温も三月の北又河津(七七八。米)で、零下三々七度が普通であるから、スケールは大きくも高度がやはり低い為だと思ふ。積雪期のこの山塊では、テリケートな気象条件と雪質の中から好機と運確に把握して、最高の技術と力で事を成す要がある。殊にこの山に於いては、雪庇の氷雪技術がすべてを成すに重要な技の部門を占めている。

まとまりのない文であるが右の様な事を結語としたい。又折を見て補正並びに、ヴァリアンテの集感を発表してみたいと思ふ。  
(五五分の一「須原」・「八海山」・「十日町」参照のこと)

27 北岳 28 マチガ沢 中止

## 29 劔岳集中

本年度の計画に依り会の一般射レベル向上と基盤確立の爲、夏の合宿として三つの徒走隊による劔岳集中とし、チームワークの育成を第一の目的とした。総リーダー田中実 劔岳集結は八月十九日。

1 (L) 田中実 林武志

(白馬―針ノ木―五色―劔沢)

2 (L) 平沢勇 福田玄二郎 佐藤信治 松田頼夫 小田尚於 町

田明 渡辺亨

(穂高―槍―茶師―劔沢)

3 (L) 鈴木輝夫 長崎正所 関谷敏

(萬幡子―菊沢―五色―劔沢)

(報告)

8月10日

(5) トップを切つて平沢、福田、洞沢岩登合宿に参加のため遅急に出发。山中の姉さんが四時から席を確保して下さった事は持筆に値する。会と会員の家庭とのつながりが出来るのは嬉しい事だ。彫んだ肩を抱いて幸甚の人となる。(平沢)

8月10日 晴

2隊 五千尺でレコードに耳を傾けながら早い朝食を攝り白沢で岳川から横尾へ向う白霞今井暖と会い同道する。徳沢の手前で今日下山する田中実利等早大山岳部二三年連中に会い立話。そしてやつと徳沢だ。徳沢から穂川新道を通つた。新村橋の所在を知らないのので梓川を渡り対岸のヤブを滑いで新道へ出る。新村橋は想像よりはるかに立派なのでガツカリする。横尾で大休止する。薄暗頃洞沢天幕着。(平沢)

8月10日 晴

2隊 北尾坂 平沢 福田 松田 高山

五六の雪渓はすでに雪なく三四に取付く。三峰直下に二・三日前の遺跡の血を幾見驚く。三峰は、福田 松田 高山 平沢の順で登る。最初の部分が先行パーティのトラバースでつかえている為、直上する。チムニーに至るも再び他のパーティにつかえ、チムニーを丘に渡り三峰直上へ。樹の如く前懸氷を登り、雪渓なきためのザイテンを下る。(福田)

8月11日

1隊 四谷(ハニ五〇四〇)―熊倉小屋(ハニ〇二五〇四五)―白馬尻(ハニ二二五〇三〇)―白馬岳(ハニ七三三五) 雨ち曇

沼池尻でバスを捨て大勢のハイカーに混つて第一歩を踏み出す。

小さな荷でスタク／＼登る途中がうらむしい。飯倉にて昼食。ガスが厚く雪渓を這って来るので風が強く寒えながら極飯を食う。今日の予定は馬尻泊りであるが、余り快調でないので登る事にする。日の満ちる大雷溪の終り頃からいよいよ／＼遅れ出す。急降では丁と廿分の星となる。御花宮の笑しきで気を暗らしつゝ、白馬山荘上の天幕場着。前のテントは女性を混えて仲々賑かだ。我々は解小にカツブシ飯を食べて早々に寝る。(林)

## 2隊 暗和雪

三峰フエース 福田 松田

ザイル三十米 ハーケン6 (使用2) ハンマー カラビナ4  
全く暗れわたったBCを後に三、四の雪渓を登り、ガスの無いのを幸とばかりルート固と照し合せる。ようやく自信がついて来る。フエースに近づくにつれて感圧的になる三峰が、我々の斗志を鼓舞へと導いた。福田トップでアンザイルンし取付く。やゝハンが気味。中間支点を作り約十五米のピッチを腕力で登り切る。続いて草付の長いバンドへ向う。直登せんとかぶり気味の懸場を再三試るも不能。松田から「右にトラバース」と云われ、石へ廻つてみる。空中に突出しているカンテ状のトラバース。技術的困難はないが、高度感が快逆すぎる。三日前東京巨大のパーティーが空中旅行した所だ。セルフブレイで松田を迎える。このバンドから二本の眼着なガリーが直上している。三十米一杯に俵つてガリー上端に達す。二十米ばかり直上するガリーヘルートを取るため上

方よりトラバースするもつまつてしまい、真横からの下り気味トラバースをやり直す。やゝかぶつていて下はスカツと切れて居る。最高にオゾイ、慎重にトラバース「あと十五」セカンドの音が残されたザイルの長さを伝えて来る。スタンスが馬鹿に悪い。顔を右にソーツと短した瞬間右足がガーツとスリッパ。ソーツと頭に血が乗中。右下のリスに勝ネンテンを起しそうな恰好でハーケンを打つ。あとは強引に乗り切る。中間ピン二本でトラバースし。テラスへ到着。松田も、ヒーヒー、云つて登つて来る。小林止の換長いガリーをスタク／＼と登り松田トップとなり、コンティニユアスで三峰に立つ。「又今日も生きて居た」とホッとして居る。三時間ハピッチであつた。下降Ⅲ、Ⅳのゴルよりグリセードとどげすもスカプラ大きく目をむく。帰着十二時。(福田)

ジャンダルム飛弾尾根 平沢 高山

奥穂で大林止。ハイカーの一歩もある望遠鏡を借りて三峰フエースの福田パーティーの行動を撮る。取付からガリーを登り草付バンドへ出てハングにかゝつた所だ。仲々悪いらしくFが流つていたが乗り越す。この分では昼までに終つてしまふのでこららもあわてる。ジャンよりT1まで下つて見たがオゾクだったので止めた。がっかりして帰りたくなつたが申訳ないので引返しゴブ頭とのゴルに出てガレ沢を下る。丁度々剣稜線の下でケルンを発見これ幸と右へトラバース。b剣稜から主稜トラバースは少し悪い。T2・T3中間のピナクルを目指す。中間にあるガリーまではホールドをしく登つたり降りたりして返つたが妙なバランスで



通過・ピナクル下で昼食を取り、ザイルを結び、H-I-Tのオーター  
1で出発。三ビッチでT2の端に達した。此処から見るT1のパ  
ットレスはスッキリして見える。飛脚尾根は技術的に向もないが  
高反感が取柄だ。大体リッチの右側にルートを取り、四ビッチで  
T1直下の向に出る。此所よりコンティニューアスでジャン頂上へ  
立つ。頭……急いでザイルを捲きサイテンを下り、廻沢小屋の上  
まで来た時、出迎えの福田等に会う。あまりおせいで遺棄と思  
ったのだそうだ。帰着五時。(平沢)

8月12日 快晴

1隊 白馬(五・一五)―鎌岳(七・三〇)―天狗池(八  
二五)―九・三五)―唐松岳(一四・一〇)―三五)―幕営  
(一五・四五)

鎌岳が雲一つなく荒々しいその全貌を現して我々のファイトを燃  
し立てる。縦走路近くは所々残雪あり。幾分水の不安が解消した。  
杓子を捲き鐘に着いた頃我々に追付いたパーティ救知れず。黒部  
側の風が強い。天狗池で昼食を攝る。燃料が不慣れが一泊したい  
様は所だ。今日の予定は此所までだが重荷に追れて名残りを悔み  
つ、天狗の大小下りにかゝる。望み薄く少数の辛さを痛感する様な  
いやな下りだ。不参加者がうらめしい。不帰二峰に着いた頃は心  
身共に疲れ靴パンとキュウリをかじってファイトをつけ唐松を越  
す。不帰で会った小父さんが、明日は八方を下るからと鈴と煙草  
を持って慰問に来る。(林)

2隊

滝谷界二尾根 平沢 福田 松田 高山

北巻沢滝谷共に雪深全くなくわずかに残る三四を望み異常を想う。  
第三尾根に行くのかC沢を一パーティ降っているので少々待機。  
さて第II尾根はP1までC沢側をトラバース気味に下り主派に帰  
ってP3P2中間の肩よりもういガリーを十米程下り水平にルン  
ゼにトラバースし北山坂P2直下に出る。登付が浮いていて嫌な  
所だ。アンザイレンしH-I-M・F-I-Tのオーターで登攀開始。パ  
ンドを左にトラバースしてリッチ上のテラスに出る。取付正面の  
カンテは腕力がなくなつたのか、舌勞させられ、傷だらけで越す。  
右奇りに登り又はスラブ、パーケンのある凹角を過ぎるとクラッ  
クだ。それを強引に突破し、更に一ビッチでP2のテラスへ出る。  
こゝまで五ビッチ。昼食をとりP1はF-I-Tのパーティが先行。  
取付にビレイハーケンを打つ。大体第II尾根は各ビッチを十五米  
位にして登ったがこのクラックだけは三十米一杯である。膝が抜  
けなくて困った。次のビッチでP1終了。どうしても稟穂へ行く  
と云う松田を一人送り三人は南坂を下る。……ところが一筋に帰幕  
すると云う結果に、松田の身振天振りにあきれ返る。夕食后OB  
の貴録を見せて五時間ファイア。現役の感涙一入であつた。

(平沢)

8月13日

1隊 出発(五・〇〇)―白岩小屋(七・〇五)―四五)―五電岳  
(八・四〇)―九・四五)―キレット小屋(一三・四五)―

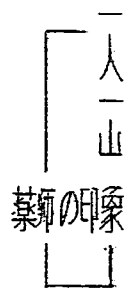
虎島槍(一五・一五)

例によつて一番に出発。牛首附近はもろく注意を要する。森林帯を上下し五電の登りだ。相当手強いが見た程ではなく、一気に登り切り昼食にする。五電の下りも天狗の大下りに必敬しそうだ。小屋泊りのニパーテイと追いつ追れつだ。キレットにかかると腰よりガス厚くなり、虎島槍の頂が見えなくなり一寸心細くなる。キレット小屋で賑ごしらえする。小屋から一峰越えると大キレットで名の通りスパツと切れて居るので、非常に恐ろしく感ずるが大した事なく通過する。道は急であるが、しつかりしてはかどりに、ガスの切間に見た釣尾根が予想より近いので感しくなる。虎島槍北峰を巻いて釣尾根の鞍部に出了所に大きな雪渓があり尋常黒部側は強風だが信州側は無風だ。(林)

之隊  
今年はこれで湖沢とも別れた。たった三日間だがやけに長く感じた。四日間二〇〇円でまかなわれてしまった。岩小屋で、いと笑しき女性二人について登つて来る仁あり。鷲賀伊藤英治氏なり。涙まれて滝谷へ行くとか。スゲー御婦人が居たものだ。山荘で現役と別れ標尾でテントを張る。(福田)

8月14日 頭后ガス

- 1隊 出発(六・四五)―南峰(七・一〇)―四五―冷小屋(九・二〇)
- (一〇・一〇)―種池(一一・一〇)―棒小屋(沢兼成)(一一・二〇)



松田朝夫

雪鳥もうつかりすると虎とりにされ跡らな槍、穂高の落合いを尻目に、私は一路西へ黒部川源境の狭道に出て、三日目に私が登った山、それが大変気に入ってしまった。禁術岳である。つい近くの立山、皷、亦アルプス銀座が人氣の中心になつてゐる今日、これを訪れる人は少い様だ。いつも雨殿を保つてゐるのである。この山は、その高さから言つても、山容から云つても、わが國第一流の山といつてさし支えない。縦走路から見ると、人に見えぬならば、巻場にして寛大、さもなければ長着の黄襟とも形容する事が出来る。唐巾の広いどっしりとした山ではあるが、非帯にとつとつと秀い山でもある。お入良しのおじさんとでも云おうか。その山下には美しい草原の中に這松の配置と云い、岩の配置と云い水の流れと云い純日本風庭園の如き所があつて、これが自然の造形かなと自分の目を弄う。これが都会になければこそ、この清潔さが保てるのだ。頂上には小さな荷があつて、その背歌納した空鉢の錆びたのが置いてある。頂上からは東百八十度の展望で北アルプス全体が眼中に入る。あれが白馬、あれが皷と指さし眺めれば、かなりの時間楽しめる。あの國体の大きな山は日に散策色が戻るようだ。暗緑色の岩壁の中に赤味を帯びた露岩、それに楓松の緑と、含蓄ある色彩を賦するに充分な容量を持つてゐる。何か品格のあるこの山が、私の脳裏からは消えない。

約尾根は北穂束腰に似ていて、大石がゴロくしている。今日又  
 快晴。我々の終着取巻岳は黒部川をばさんで手に取る様だ。冷池  
 の下りは単純な上、信州側の風の無い所なので草いきれと照りつ  
 ける太陽に全く苦しい。冷のキャンプ地に西高の二回生と思われ  
 る人が、外人二人とキャンプして居た。この附近一番は秋父の標  
 で懐かしく思われる。長ザクの分岐を過ぎると人影は殆んどない。  
 爺岳を捲いて裡池へ下る。種扱を恐わせる所で草が一面に花が咲  
 き素晴らしい。裡池で灯籠乗越に水がないと聞き、小屋から十分  
 程の所に幕営する。明日は十二時開行動必至なのでミルクを飲んで  
 元氣をつけ日暮前に寝る。(林)

2隊 上高地(一ニ。〇。〇)ー絶沢(一三。三。〇)ー一四。〇五)ー  
 養尾(一五。二五)

佐藤 松田 小田 町田 渡辺の五名横尾入。平沢、福田は停滞  
 一、保立入る予定であったが今日は横尾泊りとする。

8月15日 曇后ガス

1隊 出発(四。〇。〇)ー新遊(六。一。〇)ー鳴沢岳(七。  
 一五)ー赤沢岳(八。〇。五)ー九。三。〇)ースバリ岳(一一。  
 〇五)ー針木岳(一二。〇。〇)ー一五)ー針木峠(一二。四  
 五)ー一三。三五)ーカモシカ岩下流(一五。四。〇)

未だ暗いうちに出発。頭いたり落ち込んだりして歩く。草や木で  
 塵から下が朝露にビッシヨリとなる。大町の灯が見える。前方か  
 ら傳体の知れないエールが聞え、種か峠と語ると語る。篠川側は方

しているが、黒部側はなだらかな道松帯だ。赤沢岳の岩峰につき  
 第一回の昼食にする。針木スバリ間で泊った連中の話だと、我々  
 より先行するパーティーがあると云う。傳体の知れぬエールは彼等  
 がその主だろう。スバリの岩峰は仲々勇ましい。針、木岳はガス  
 で展望なく、早々に峠に降り第二回の昼食。これで我々の欲求も  
 九分通り終つたと思うとグツクリと来る。大沢側の雪渓から冷い  
 風が吹き荒んでいる。峠からの下りは石がゴロくして居て大灰  
 だ。水の流れを見てグツと心強くなった。針の木谷で四日振りの  
 流れる水を飲み、一時間程本流を下った台地に天幕を張る。水も  
 新も山程あり安心だ。九分通り終つて二人でさ、やかなディナー  
 を催す。我々は計画より一日分速く歩いているので明日は氣が来  
 だ。他のパーティーはこれから苦しみ始めめのかと思うと申さない  
 様な氣がする。(林)

2隊 出発(六。一五)ー捨沢小屋(八。三。〇)ー九。〇五)ー昼  
 食(一〇。〇。〇)ー一。〇。〇)ー捨尾(一四。〇。〇)ー一五。

一五)ー幕営(一七。〇五)

出だしは皆好調。ガスが稀れ槍見河原で小休、槍沢の香溪は全然  
 見当らない。ジグザグにかゝる下で昼食。だが事態はこゝから急  
 変した。グリーンベルトまで松田よその女の手に煽まされて良い  
 氣持でバテている。ガス濃く視界五。〇米位。立止ると悪い位だ。  
 町田グロッキーになり、全くのヒマラヤンピッチ。ザックを交換  
 し、やつと肩につく。此所まで六時間と予定したが何と八時間近  
 くか、っている。第二回のカンパンを啗り、福田、小田、渡辺、

頂上住溪。西側の下りは松田がオソク。カス増々深く狭うつになる。千丈削に径が捲いてから五〇。米位の地点に幸いに平坦な所を見つければ、稜線より百米位下に天幕を二つ張る事が出来た。水も誰かが探して来てカンパンの夜食をとる。(平沢)

3隊 (タイム表失)  
 久し振りの重荷にフーフーいながらも靴音だけはすばらしい。山、神でエンコしていると変なオッサンが曰く「今日は湯で泊れ。無理するのは良くねえ」と嫌に高圧的にぶつしやる。第三隊はよほどボケテースと見えぬらしい。湯で泊る事も考えたが出来た。ただ登ってオカンを決意。落ちたら一寸止りそうもない樹立尾根をヨタヨタしながらも神釜を使う。関谷はくれ気味。思うに鈴木五貫、長崎、関谷七貫。

不動岳、南沢岳の物寒いガレガスの間に見える。日も暮れ、心細くなる傾尾根上にオカンと決める。ホツとするやら寂しいやら。ニ〇〇。米附近か。(関谷)

8月16日 晴

1隊 出発(八・五〇)→南沢出合(九・三五)→五〇→平(一〇・〇五)

枯木と岩石による巧みな調和は南西的風景をおりなして流れる針木谷である。全く天候に恵まれツイているの一言につきる。この場所を有効にいたゞいて五色まで二日行程とする。南沢出合からの約一時間、重荷の下降者にとっていさゝかの難路である。左岸

四ヶ所についている標高がそれである。針金が安全を計つてはいるがゴムにも等しい針金でもある。やがて谷を左手に高してウツソ、いたる稜線木帯をしばらく行くと黒部川平の釣橋にかゝる。生命の保証されないガタ／＼の橋が黒部の縁を細く長く、しかも曲線を成して居る。一人づつ渡れば事故も一人ですむという理窟が成り立つコワイ釣橋ではある。平小屋から約百米で天然温泉のあり、広い河原に幕営。(田中)

2隊 出発(七・一五)→双六池(一〇・〇〇)→一三・〇〇→黒部乗越(一六・三〇)

朝焼けの空に北麓尾根のアンギラスの背の様な姿がシルエツトとなつて浮出ていた。いくら喰つても腹のへるカンパンを朝食として出発。黒沢岳をどうやら越し空飛Asakuraをかゝえて双六池。池の水は小さい上にホイルで汲めばホーフラが二・三匹は入る仕禾。ホーフラ煮込の飯が出来たが水が多すぎたらしい。一時双六池を後にする。程よい所で天然色パーテイが休んで居たので我々も一服つける。(天然色即ち「色つき」女性が居ること)別れる時サヨナラと云つた。全員すかさず答えたが山行中すつとついていたM氏に云つたのかも知れない。三候運筆の覆上は素外シヨホイ所なので素通りして四時半、黒部乗越の仄々としたテント場につく。北に乗越岳の女性的な俊姿が見える。バンドの演奏する。セレンゴウワ、を聞きながら前夜の星を仰いで就寝。「空のお星さま、そして江戸のあの娘よ、おやすみなさい」と云う所で八月十六日のとばりは晴れた。

(静かに合唱) へ天幕夜露にぬれて

北嶺汗 都すむに遠のく

そのる忍ぶ頭目のアルバイト

涙流れてやまず (小田)

3隊

唐沢岳・鏡鬼岳のシルエット。こんな所で御来光とはひろい物だ。何も食べずに六時出発。七時半独標につく。こゝで水溜りの水を入んで朝食の乾パン。関谷のあゆみはやはりおそく鳥帽子小屋着け十時。こゝで鈴木、関谷のザックを交換して十二時発。赤牛岳。こゝに栗雨。五色のニ隊のコースが眼前に展開する。この附近は小池が多敷あり、キャンプに絶好だ。唐沢岳の上りで今度付鈴木不調。唐沢岳の下りはブツブツな下りだ。唐沢の入口はかなりはつきりついていて、ガタ／＼下ると三十分程で水流が現れ、思う存分ガブ／＼飲む。展望もなくたゞ足もとを見て下る。丹沢の滝の流径の狭なもの。河巾が大きくなる程河岸赤さが多くなり、よじ登ったり飛び降りたり。このガタ／＼で関谷手帳を落し記録もなくなる。水壁の多い時は四十米位の滝と思われる所を越降る。日暮も迫り、出合から約一昨上流でオカン。六時。又し振りの水飯にありつき、八合を三人でべロりと平けた。(関谷)

8月17日

(11) 1隊 出発(五・二)―刈安峠(六・五五七・一五)―五色ヶ原(九・〇〇)

石川吹一の感想。可愛い山々で得た親しみが未だかくされて居るうな平小屋と親父さんへの愛着が妙に私をとりえてならない。刈安峠へは潮来村杯のジクザクで低山的なアキが来る。裏銀座を目前に、そして竜五のフリーム色のガレは何と魅力的な峠であるう。いつし小笠原帯となり五色ヶ原特産の芝生と池邊が点々と現れる。疲念ながら今年雪の色がなく又水の色もなく、華は日照りに枯れかけて居る。午前十時だと云うのに近い五色が原にホツンと天幕を張ってすつかりのんびりとする。(田中)

2隊 出発(七・二〇)―五郎岳肩(九・二〇)―一〇・〇〇―

北俣岳(一三・五〇)―一四・一〇―木郎兵衛平(一五・

〇〇)―一五)―景色ゴル(一五・五〇)

尾根通しの道をさげ小さな流れを幾つか渡り、森林帯を行くと黒部五郎のカールのふところへ飛び出る。朝日を受けて深く白い岩道松の線、そして取り残された森に岩陰にある雪渓の白さ。皆右には姿を垂に垂して容易に見せないと云われる雪の平が呑むことなく神秘的な姿を尾せている。雪渓の右を登ること三十分五郎岳北側の肩に出る。初めて知立山がその雄姿を現す。早くも飛弾側からガスが吹き上げて来る。頂上往復五郎岳を早々に下り、水目岳。赤牛岳を望む鞍部で昼食。夜露にぬれた天幕を干す者。雑誌の切り抜きをする者。それ／＼食台の一時を染しむ。こゝからは緩い登り降りの単調な尾根歩きだ。北俣岳を過ぎた頃、トップのFが突然、電を取ってしまい、ですか、その声と殆んど同時になり三人がザックを投出して電を追う。巧みに道松の中に迷込み深く

で高尾に作る森に道松を落つていた。高原状の草原が長く、森は黄色く枯れか、小さな池は干上つてゐる。やがて太郎小屋につく。水鏡を覗き、茶師岳との最後峰前遊歩道に天幕を張る。

(野田)

3隊

天幕場を出発した時は霧は既に高く揚つていた。河原は大石が重り合いケルンが点々と続いている。やがて野沢は針木谷との合流点に出た。一隊の置手紙を発見。道は沢身に忠実についている。二十四時前後に平から登つて来る多数の人に会う。針金の箇所は大きしたことはない。針葉樹の中に入り、ほどなく明るく平の釣橋に突然出た。昼食をとり河原に滑っている温泉に降り、木塚を失して出発した頃は正午を少し過ぎて居た。二時間程で刈安峠に着く。ザラ峠へ行く道と別れて不規則な石畳を敷いた森打尾根へ出る。あたりにガスが立ち上り涼しくなる。五色原の氷端にたどりついた。道松の小断い立を感えると一隊のテントがボツンと目に飛び込んで来た。(長崎)

8月18日 霜岩ガス雨

1,3隊 併走

五色原や釜平でのんびり通してみた。この日は法人の希望ではなかつた。緊縮した日々にあつて、この日は何と我々を承らけてくれるであらう。山を想えば人恋し、人を想えば山恋し。と云う。百瀬康太郎氏の名句がジーンと私をとらえる一瞬である。

クッシュヨンのきいた山花畑に誰かからも行く養入つてしまふ。

(野中)

2隊 出発(六・〇五)―栗師岳(八・二五)―九・〇〇―昼食

(一〇・四〇)―一・三〇―スゴ小屋(一二・一五)―

越中沢岳直下(一五・一〇)―五・〇〇―一・〇〇

(一八・三〇)

六野出立すく栗師への登りにかかる。やがて眼前がパッと暗らけ日本奥の様な所に出る。びつしり生えそろうた草。屈伸する灌木。茶室の朝霧が霧の光をあげて黄金の森の様に輝く。昔渡村の空。自然の美に心ゆくまで眺め入りながら抱の一斉射撃である。ぐんぐん高度を越し、つらい登りがつづく。栗師の頂上につくと、の事だどりつく。誰かが天然色が思えたと呼ぶ。さあ大変。どこか。あそこ。あ、かくれた。出た。と大変なさわざだ。平々に出発。俄然ピッチ快調。下君感絶つて転倒。大向うから声あり。アアアア。その時の下の満足そうな顔。昼食をとる頃からガスがかかり始める。スゴの水場は醤油をうすめた様な色をしている。芋炭通りだこの水を飲むのかと思うとゾーとした。おくれしもの。大幸になるかな。である。スゴ果敢にて小悪。日は道前から照りつけ身をかくす所もない。暑さにあぐらされたのか。Mのピッチがおそい。やつとのことで越中沢岳についたのが三時カンパンを食べる。間もなくア立が来た。寝れている上に雨に降られ、皆の意気消沈。やがて高山の登りにかゝったのが五時。高山の頂上にて丁の置手紙を発見。百瀬又立上りの中と五色原を

突走る様に下りた。人のおらぬこの五色原に、西側のテントが四  
張り並び自然を羨する十二人の活者たち、暗く静まった北丁の一  
角に、その穴せしソロー寸が有り響いたのは三うまでもない。

(渡辺)

8月19日 雲ガス散り夕刻雨

全員出発(六・一〇)―ザラ峠(六・三五)―七・〇〇)―獅子岳

(七・五五)―鬼・淨土コル(九・〇〇)―九・五〇)―

越(一〇・四〇)―一・〇〇)―峰山(一・一五)―四・五〇)―

一五)―別山乗越(一四・〇五)―一四・三五)―飯沢(一五

・五五)

五色原は暗澹たる雲行きの中に朝を迎えた。ザラ峠で外耳炎のた  
の下山する鈴木と別れ、獅子の急な登りにとりついたが、索する  
程のこともなく越える。四方深霧で見るものとして實にない。鬼・  
魔王のコルで昼食。ガスの切間から時々急峻なピークが見えた。

浄土を下り切ると一越小屋である。このあたりはすでに登山者も  
多く観光地臭い。立山への最後の登りにかゝる、時々薄日が指す  
が三千米の山とてやはり寒い。真砂土の下りをとばす、目の前に  
別山乗越が見える。地球谷から吹上げる風が肌寒い。飯岳はそ  
の姿をガスの中に隠していたが八峰の炭化あるスカイラインは何  
とか見ることが出来た。ガスは散りく散り、雪片があやしくなる。  
穴に入ってサーツと来たのは三うまでもない。(松田)

(13) 8月20日 終日ガス風散り

出発(六・一五)―平蔵(八・〇五)―飯岳(八・五五)―  
平蔵(九・二五)―一〇・一〇)―帰着(一三・〇五)

松田をキーパーに突し十名で飯岳に出発。荷物がないので足取り  
も悪い。朝の内は鹿島、五竜が見えた。富山平野、そして吾々の  
登山者が初めて見る日本海も見える。やがて前飯を通過する頃より  
ガスで一面お、われる。岩に、ガンバッテ、と書いてあったのが  
印象に残った。平蔵遊樂小屋で一息入れ頂上を目指す。強風吹き  
まくり一寸冬山を思させた。飯沢上付多くのケルンが立並んでい  
た。視界零、遊樂小屋で昼食をとり下る。途中飯場で登って来た  
御婦人に足を持って貰ったMはこの日も又一行中のラッキーパー  
イだった。飯徒候は天候に黙まれず残念なことをしたが、長い鉄  
道のしめくりが出来た。キーパーの作ってくれたお茶を飲んで  
いると雨が降り出した。(佐藤)

8月21日 風雨散り

飯沢旅籠(九・三〇)―別山乗越(一〇・〇五)―天知(一  
一・三〇)―私法(一三・〇〇)―トラツク乗車(一三・三  
〇)―美女平(一四・〇〇)―富山

昨日から降り続く雨は、かの覆えも見せない。天幕は浸水と  
風に、やるかたない悪条件である。睡眠は一、四時間位しかとれ  
ていない。飯法を終えた我々ではあつたが脱落することしばし。  
如何なる天候にか、わらす亦尻下山と決めた。豪華な炭釜食糧  
を食い飯櫃食って気野をあげる。雑話がなくなり、命がなくなり

今年度冬山はスキー合宿は行わず会の全資材、全力を八海山に投入する方針である。金期間参加出来ない者も交代して参加して貰いたい。会の技術がどの程度のものか、我々の団結がどの位のものか良き試練となろう。参加希望者は十月十日迄に意志表明のこと。オバーズボン、オパーシユウ、毛皮手袋等数とまとめて注文する予定。

短草がなくなる、さあ撤収だ。ガタ／＼ふるふる酒となる者、痛く冷い雨はなんと凄惨な雨だろう。体温維持の急ピッチ。極寒と越えろと風は一段と強い。一面に水の流れる雷鳥沢を十五分ばかり降り雷鳥荘で一服。地獄谷のウナリは風雨の中に一番無意味味である。かのスイス風の風景はすつかり雨にた、かかれて見るすべもない。天桐小屋でカンパンを分取かじりながら下る。道分小屋がホーツと浮び、不逞で誰かが派手に転ぶ。赤土に糞を垢つた様な弥陀原の径は川と化し、グチャグチャ滑る靴が痛ましい。弘法も過きる。バスを待つ靴いたまが我々を指さしている。風こそおさまったが雨は増々強い。弘法より一時間半辛にトラックに便乗することが出来た。茶色の口唇でトラックを降りた我々は水漬けの肉体に遠きなかつた。ベチカの燃える薪枝の天文平取で約二時間軌跡を行って八分間百五十円のケーブルは無事我々を下界へ下してくれたのである。雪山取にて解散式を行い、廿九年度主は旅券に廿七年度主はステーションホテルを試みた訳である。都合は何と着いたことだろう。いや、人助けな人と我ま、な事だろう。

(田中)

# 夏山を顧みて

田中 申夫

夏山は終わった。だがのんびりしてはいられない。春、夏の合宿を終えて、我々は今訓練期間の途上にある、息つく暇もなく、仕上げの秋山を登ればねはならない。更に我々の大半は学生であるが、肉、筋色の秋となるだろう。若いが故に与えられた任務ではない。若いが故に持ち得る情熱であり、持たぬのである。高校山岳部の意欲を、単に無手芸として批判したり、老登山家に鞭を打って遠征させる時、我々の年令は何と貴重ではなからうか。悉意的意欲をなくしていかなる進歩が得られるだろうか。

この時にあたつて、本年度の夏山を振り返ると、いささかのさびしさをおぼえるのである。欲走参加者と、意欲的個人山行が持てた者はともかくとして、寂寞に夏を過ごした者は、大いに反省していたゞさたいたのである。我々の仲間が、最早、連れられぬば山に登れる仲間ではなからう。遠調さこそ吾人の隠居である。そこへお連れられた者も、会費を再認識していたゞま、会費の向上に至るに作られる公式山行であるのに、重大な理由なくして不参加に終る事は、会費の資格を失う者である。商れるには惜しい友人達であらう。いつか山に登せられた人達であらう。しかし、当会の目的を認識し得る人達であらうか。あえて云うならば高尾の



た様にみえる馬車馬の敷しさから走れようとするならば、当金を  
 五つていたゞき度いのである。経理解ではあるが、女性を入れな  
 い山岳会もある。ハイキングを目的とした優秀な会もある。我々  
 は、西高の・Bによつて単に交友の爲に生じたのではない。目的  
 を知らなければならぬ。より高く、より困難の連続なくして何  
 年か元には、如何なる先達となり得るだらうか。とくと考えて、  
 秋山に臨んでいたゞきたい。

▲夏山跋天であるが、今年はその規模を多少大きくして初夏中形  
 態をとつたが、分隊行動として、いさゝか派手なかつた。これは  
 会員の色額な参加によるもので、主流会員が学校を出てゆく采年  
 度辺りから長期休暇が得られぬ弊に於るので、はなはだ残念な事  
 でもあつた。各隊とも予突通りに兼合し得たが、これも異常なほ  
 どの天候の恵さによるものであつて、決して飛躍してはならない。  
 逆に想像出来ないほどの水キキンに苦しんだ第一隊の後立山は、  
 将采の水場地図に貴重資料となる事だらう。第三隊のリーダー  
 シップは残念ながらゼロに等しい。これはリーダー会において、  
 リーダーの不足から、正会員以外をリーダーに指名した事によつ  
 て生じた結果の失敗であるが、又正会員との差であらう。リーダ  
 ーたる者、一たん山に入ったならば、絶対的信頼をその力量によ  
 つてパーティを導びかねはならない。命令を下し、軽身で歩く  
 は簡単である。しかし、命令とは厳しいコーチに過ぎないのであ  
 る。

苦しい条件下によつて、西華な、又人が悪い際ちな仕事を買つ

て出たり、吾んで他人と相談する態度等とは勿論出来得る人間で  
 は行はならない。リーダー論はリーダーが学ぶべき字間で付は  
 く、至極者は次々と新しいものと入れ換えられなければならない。

第二隊は、前半出発時間が遅い事によつて苦難を招いた隊であ  
 った。夏山といえども午前中の自然的、精神的好條件をとり入れ  
 ねはならない。盛夏においては暑さ責けと雷雨が以外な障害とな  
 るからである。西朋会の無雪期における出発を五時と定め実行し  
 得るならば高い誇りとなつて評価されるべく出発時の怠慢さはみ  
 にくいものである。

第一隊は、本会において前例の無い食糧不足を招いたが、異常  
 な食欲感と、長い歩道を大食い二人で歩いた結果によるものであ  
 つて、今後の食糧計算に一考を要する。長い徒走は始めての者も  
 多からうが、この見識を上台に、更に困難へと進み、常に在存す  
 る苦しみと、不得手を買つて出る様な困志を懸つていたゞき度い。  
 礼節さをもつて若い勵志を燃し得るならば、西朋會商会のネー  
 ムとナンバーは本当の飛段に貴重な文字となり得る事だらう。



LA MORaine		1955. 6. 19-9. 9.	
13	源次郎沢	6. 19	山口
14	桐葉窪尹倉三山	6. 26	林(春)
15	本仁田山	7. 3	林(春)
16	立山穂高岳	7. 3~8. 9	田中(将)
17	北岳	7. 11~14	福田 林(武)
18	敷科山	7. 25	町田 松田 渡辺 尾里
19	上高地	7. 20~25	中野
20	扇土山	7. 30~31	林(春)
21	針木・兼師・船	7. 30~8. 9	田中(実) 現役山岳部
22	(29) 鉢缶集	8. 9~21	田中(実) 平沢 福田 佐藤 長身 鈴木 松田 小田 林(武) 町田 岡谷 渡辺
23	長沢背藪	8. 20~21	林(春)
24	北八天狗岳	8. 23~25	田中(将) 米野
25	勘七ノ沢	9. 1	山口
26	原折山	9. 4	山中 岩崎

## 会 務 報 告

▽リレー会 七月廿日於平沢宅

田中(実) 平沢 福田

一 夏山合宿報告その他

二 現役監督として  
田中(実)を現役夏山に参加させる。

▽七月集金 (記録喪失) 七月廿三

日永川神社

係 福田

田中(実) 福田 平沢 林(武)

中野 鈴木 山中 岩崎 龜山 伊藤

菅田 米野 町田 渡辺 松田 長崎

佐藤 小田 林(辰) 平山先生 現

役四名 計二十四名

▽八月集金 八月廿八日於佐藤宅

係 佐藤

一 夏山合宿報告その他

長崎 田中 田中 平沢 鈴木 山中

岩崎 龜田 龜山 伊藤 佐藤 松田

小田 米野 町田 林(武) 岡谷

渡辺 林(春) 現役松田 計二十名

▽会員 移動

九月一日付左記のもの正会員候補に任ず

17位 藤 信 治

七月廿五日付林会認可

5森 沢 拓 治

▽会 員 新 入

ザイル三〇米一〇一(東京製鋼)三三〇〇円

▽西高山支部近況

八月廿日付幹部交代

第十二代Cリーダー 松 田 悉

Sリーダー 高 山 一 彦

Sリーダー 北 村 護 行

マネジャー 田 辺 克 之 助

▽集 会 予 告

十月集會 十月廿二日(第四土曜) (保 平 沢)

十一月集會 十一月九日(第三土曜) (保 田 中(実))

十二月集會 十二月十七日(第三土曜) (保 福 田)

編 集 後 記

○夏山合宿飯岳集申報告に主眼を置いて編輯してみた。悪い切つて高松山支部並の凡合宿としてみたが、今まで気のつかなくた多くの欠点がある。より高きなるもの、より未知なるものへの前進の基礎として、各々が多量度より検討する事を願うものである。

○その心の中に新たなる世界を開かんとする時、人は悲み苦しみ煩悶する、剣道の苦悩である。冬は山は我々にとつて未知でありそして美であり、彼岸でもある。あと旬日を出でずして高嶺は新雪に初化装する。そして我々のおとずれを待つ。すばらしきかな我がハイマートの峰々。

○考えようによつては一年中で一番恐しい季節秋山である、果敢にして慎重なれ。(哲 利)

西 朋 報 告 第 8 号

発行日 昭和廿年九月十五日

発行者 郡立西校 O B

西 朋 登 高 会

中野区大和町一八。田中才